巻　頭　言

葉っぱのフレディー

公益財団法人 日本植物調節剤研究協会　専務理事
横山　昌雄

令和の初めての正月を迎え，新しい時代の幕開である。農業も新しい時代に向かっている。スマート農業を享受できることが期待される。

最近，無人大型トラクターが農地を耕作している映像を見る機会が増えたが，手塚治虫の漫画「魔人ガロン」を思い出す。ガロンは宇宙から来たロボットで，土地を改良する能力がある。それに気づいた人々はガロンを使って土地改良しようとする。しかし，ガロンが作る土地は人が住めない，空気すらない宇宙のものにしてしまう。小さな田んぼや水路を区画整理し，大区画にした水田を大型トラクターが走っていると，魔人ガロンが走り回っているように見えるが，ガロンの作る農地にはならないだろう。

整備された農地を見ていると日曜日に解放されても遊ぶ子供がいない道路を連想される。かつて，道路は子供の遊び場であった。キャッチボールや三角ベースは近所にある広い道路でやったものである。道路が歩道と車道に整備されると自動車が侵入し，子供の遊び場ではなくなった。公園はボール遊びが禁止されていた。校庭は場所取りが大変で，上級生にはかなわない。河川敷のグラウンドは大人の野球チームに占領されていた。お寺は住職に怒られるし，そもそも石畳で野球には適さなかった。ボール遊びをあきらめ，他の遊びを探すうちに，遊び場を探すことが遊びになっていた。東京オリンピックが開催される以前のことである。現在では道路は完全に交通のためのものになった。

子供の頃とは違い，道路や公園は散歩するものにしている。先日，上野公園を散歩していたが，桜や銀杏が落葉し，寒々しい。どこか暖かいところと思い，国立科学博物館の入口まで行った。ところが親子連れで大賑わい。上野公園には他にも沢山の美術館や博物館があるぞと思い，博物館巡りを始めた。といっても入館したのは東京国立博物館と国立西洋美術館の２館であるが。国立博物館では薬師如来像や十一面観音像などが展示されているブースを鑑賞していたが，インバウンドが大挙して入館してきたので早々に退却した。西洋美術館は特別展の「ハプスブルグ展」を開催していた。「ハプスブルグ展」は魅力的であったが，並んで見る勇気が起きなかったので，すいている常設展に入った。常設展とはいえ，モネ，ゴーギャン，ゴッホ，マネ，ドラクロア，ピカソなどの有名な作品が展示されていた。18世紀までの作品は貴族の肖像画やキリスト教に関係した絵画が多く，19世紀以降は市井の人々を描いた絵画や風景画，抽象画などが目立った。その中で，セザンヌの「葉を落としたジャ・ド・ブッファンの木々」が目に留まった。数本の葉が落ちた木々が粗いタッチで描かれ，また農場と小高い丘がバックに描かれたスケッチ風の作品である。木々は落葉しているが大地は緑で描かれていた。晩秋の農場の風景であろうか。この絵が目に留まった理由は，数日前に「葉っぱのフレディー」という絵本を孫たちに読み聞かせていたからである。

「葉っぱのフレディーは春に大きな木の梢に近い太い枝に生まれました・・・数えきれないほどの葉っぱにとりかこまれ・・・ひとつとして同じ葉っぱはない・・・夏になるとお日さまが早く昇って，遅くしずむ・・・気持ちがいい・・・秋になると寒さがおそってきました・・・一気に紅葉しました・・・同じ葉っぱなのにちがう色になる・・・冬が来た・・・ひとり残らずここからいなくなる・・・みんなひっこしをする・・・フレディーはひとりになりました・・・初雪です・・・フレディーは空中に舞って・・・地面におりていきました・・・目を閉じねむりに入りました・・・また春がめぐってきました」

この絵本の原作者はアメリカ人の教育者レオ・バスカーリア。「いのち」や「死」を教えてくれる絵本。この絵本を読んだ後に孫たちは「世界は変化しつづけているんだ。変化しないものはひとつもないんだよ。葉っぱは緑から紅葉して散る。変化するって自然なことなんだ。」の文節に興味を持った。「変身」ものである。そこで「冬が終わると春が来て雪はとけ水になり，枯葉のフレディーはその水にまじり土に溶けこんで木を育てる力になるのです。フレディーは生まれたところにかえったのでした。」の文節を再度聞かせた。単なる変身ではないことを伝えたかったが理解したかは定かではない。